

英語授業におけるアクティブ・ラーニングの実質化をめざして

著者	竹内 理
雑誌名	平成24年度版『NEW CROWN』 TEACHING ENGLISH NOW
巻	31
ページ	2-3
発行年	2015-03
権利	株式会社三省堂：本文は株式会社三省堂の許諾を得て作成しています。
URL	http://hdl.handle.net/10112/9875

英語授業における アクティブ・ラーニングの実質化をめざして

竹内 理

(関西大学)

1. アクティブ・ラーニングとは何か

昨今、アクティブ・ラーニングというコトバが教育の現場で盛んに使われるようになり、さまざまな試みが行われている。その試みの中では、生徒たちを能動的に学習活動へ取り組ませ、自律性を育み、結果として協働して学び合うような関係性を作り出していくことが狙いとなっている。しかし、そもそもアクティブ・ラーニングとは、「思考を活性化させる学び」のことを指している。学習指導要領にも強調されているように、学びにおいては、「思考」、「判断」、「表現」(発信)が大切になるが、この中でも特に「思考」の部分の起点とした学びの形態が、本来のアクティブ・ラーニングといえるであろう。この本来の意味から考えると、今までのように知識を注入して、この定着量だけを評価する学習ではなく、また単に技能の習得と自動化をめざすだけの活動でもない、「知識・技能を統合して思考を深め、その結果を自ら判断して表現(発信)しながら、(何らかの)目的を達成していくような学び」が、真のアクティブ・ラーニングとなるのであろう。

思考を深めるためには人と人との関わり(対話や相互作用)が有効であり、また昨今のコミュニケーション指向型の英語教育の潮流とも相まって、プロジェクト・ワークやディスカッション、プレゼンテーション、ディベート、「教え合い」といったグループ活動のみがアクティブ・ラーニングと同一視される傾向にある。しかし、アクティブ・ラーニングには多種多様な形態が存在している。たとえば、教員と生徒の英文ダイアリー交換の活動も、生徒が自ら調べる文法学習の活動も、そこに上述したような「思考」を深め、主体的に「判断」する過程があり、知識

と技能を統合しながら「表現」(発信)し、「目的」を達成していく要素があれば、十分にアクティブ・ラーニングと呼ぶことが可能になる。

2. アクティブ・ラーニングは万能薬か

アクティブ・ラーニングの効能を語る時、必ずといってよいほど引用されるのは、図1に示した Learning Pyramid であろう。このモデルによると、アクティブ・ラーニングの形態で学べば、70～90%もの学習の定着(記憶)があるという。しかしながら、Benjes-Small & Archer (2014) が指摘するように、このピラミッドには科学的根拠が十分に存在していない。また、山地(2014)も「アクティブ・ラーニングをやってみたというだけでは所期の学習が成り立つとは限らない」と、実質化していないコトバだけが一人歩きすることへ警鐘を鳴らしている。

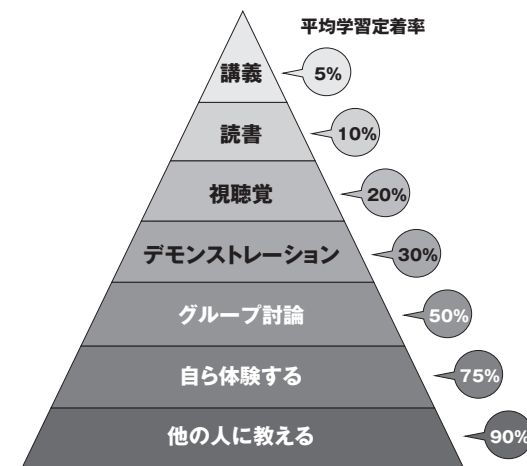


図1 (Source: National Training Laboratories)

それでは、アクティブ・ラーニングを実質化し、学びを成立させるためには、何に注意すればよいのであろうか。そこには、教員側の緻密な授業設計とフィードバックへの主体的な取り組み、そして信念や態度の変容までもが求められているのである。

3. その良さを引き出すためには

「授業設計」の視点からみたアクティブ・ラーニングの良さを引き出すための所作としては、まず、目的・目標の設定と共有化があげられる。生徒たちにわかりやすい形で学びの目的・目標を提示し、それを生徒と教員でしっかりと共有することが、アクティブ・ラーニング実質化の第一歩となる。また達成に向けたロード・マップ(計画)を示し、生徒たちに不安を与えないようにすることも、大切な所作の1つといえよう。

目的・目標の設定・共有化と関連して、評価指標を事前に明確に示しておくことも、授業設計上、重要である。授業はアクティブ・ラーニングの形態だが、評価は従来型のテストで知識の定着量を問うということであれば、この学習形態はうまく成立しない。

これらに加えて、「知識や技能の習得」を主にめざす活動と、「思考を深める」ことを主とする活動をうまく連動させることも大切になる。英語の授業では、知識や技能の定着という基盤があって、そこから思考を深めるという学習形態が可能になる場合も考えられるため、この両者の連動はおろそかにできない。授業設計の段階で、「知識や技能の習得」と「思考を深める」活動を分断してしまわないよう、(両者を関係づけることに)十分に留意しておく必要がある。

「授業運営」の面からみると、グループ・ワークを使う場合は、いわゆる「ただ乗り」への対応が必要となる。自らは何もせず、集団の成果を利用しようとする学習者を減らすためには、活動ごとに各学習者の果たす役割を変える、グループ間での競い合いを導入して一体感を高める、などの所作が必要となる。また、自らのアクティブな働きかけがなければ学習そのものが成立しないような仕掛け(たとえば

グループ活動+個人活動)を入れたり、ポートフォリオ(個人)を利用して、振り返りを重視し、過程と蓄積が評価されるようにしたり、といったさまざまな工夫も必要となろう。この際、フィードバックの与え方も重要となる。具体的な問題の指摘に加えて、生徒一人ひとりを注視しているというメッセージをコンスタントに送るような、情意面に対する地道な働きかけが、従来よりも一層強く求められるようになる。

「授業運営」では、生徒と教員、および生徒と生徒の関係性の構築も大切となる。「他者から受け入れられるのか」という不安を抱いたままのアクティブな学習は通常あり得ないため、学びの過程で、関係性へ十分な配慮が必須となる。

最後に、教員の「信念や態度」であるが、本号で山本(2015)が述べているように、「説明したい欲求」を抑え、まずは生徒たちに考えさせることが重要となる。はじめから教え込まないで、生徒たちが「考える」ことの確認者・促進者になろうとすることは、多くの教員にとって、これまでの信念や態度の変容までもが求められる大きな転換である。しかし、アクティブ・ラーニングの効果的実施においては、この転換が必須となる。

4. おわりに

アクティブ・ラーニングは、導入すれば必ず成果が保証されるという万能薬(panacea)のような学習形態ではない。その実質化に向けては、上述したような諸側面を考慮に入れる必要があり、教員側の積極的な関与が絶対の条件となる。「アクティブ・ラーニングはアクティブ・ティーチングでもある」ということを忘れずに取り組んでいきたいものである。

【参考文献】

- Benjes-Small, C., & Archer, A. (2014). Tales of the undead...learning theories: The learning pyramid. Retrieved from <http://acrlog.org/> 2014/01/13/tales-of-the-undead-learning-theories-the-learning-pyramid/
- 山地弘起(2014). アクティブ・ラーニングとはなにか『大学教育と情報』146, pp.2-7.
- 山本崇雄(2015). 「教えない」授業の魔力ー自立した学習者の育成のためのアクティブ・ラーニングー *Teaching English Now*, Vol.31, pp.4-8.